資　料

# 精神科看護師が患者のストレングスに気づいたきっかけに関する研究

松井　陽子[1]，片岡　三佳[2]

## The trigger which psychiatric nurses noticed the patient's strength

Yoko Matsui and Mika Kataoka

## Ⅰ．はじめに

1981 年の国際障害者年以降，人権回復の運動，障害者の権利に対する注目，施設処遇による経済的負担などが見直され，多くの先進諸国で医療や福祉の位置づけが変化した（野中，2011）．日本においても，1993 年に障害者基本法が成立し，精神障害者が障害者基本法の対象として位置づけられた．また，精神保健法は精神保健及び精神障害者福祉に関する法律に改正され，従来の保健医療施策に加え，精神障害者の社会復帰などのための福祉施策の充実も法律上の位置づけが強化された（厚生労働省，2010）．さらに精神保健医療福祉において，利用者主体のサービス，利用者自身が自分の人生設計を行うセルフケアマネジメントが求められるようになった（野中，2011）．

このような流れの中で，1990 年代に Rapp が提唱したストレングスモデルを活用した精神障害者の支援が注目されている（三品，2003）．ストレングスとは，その人の性質・性格，技能・才能，環境（社会資源），関心・熱望である（Rapp et al.，2012）．ストレングスモデル実践の目的は，人々のリカバリー，生活の質を変えることを支援することであり，支援において，その人のストレングス，関係性，希望の確立に焦点を当てている（Rapp et al.，2012）．完全な治癒や問題解決が困難な事が多い精神疾患において，何らかの困難や症状があったとしても，それとつき合いながら生活していくという視点が必要である．そのため，医療者は問題を解決するというモデルから，患者の強みを生かすことで解消するという発想に転換することが必要である（萱間，2016）．

日本の看護教育は，医療の高度化と共に，専門職としての判断力が問われるようになり，問題解決力や判断能力の育成を重視したカリキュラムが作成され（北川，2008，岡田 他，2017），政府の報告書や看護教育の学会・雑誌において問題解決思考の重要性が言われ続けてきた（岡田 他，2017）．しかし，2017 年に文部科学省が示した「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」においては，看護過程に対象者のニーズだけでなく，経験や望み，ストレングス，ウェルネスを治療方法の選択や生活と関連付けて考えることが求められるようになった．つまりは，精神科看護師には，疾患や障害を抱えることでの生きづらさに着目し，問題を解決する能力と，生きづらさの中においても生活してきた対象者の経験や対処を活かした支援を検討できる能力が求められている．

しかしながら，現在，臨床現場で働いている看護師の多くは，問題解決思考の教育を受けてきていることをふまえると，看護師には問題解決型が基本にあり，患者のストレングスに焦点を当てることは容易ではないと考える．精神科看護においてストレングスモデルを実践するには，まずは看護師が患者のストレングスに気づくことが重要であると考えた．「気づく」ということは，今まで目を向けていなかったことに目を向けることであり，「気持ちを向ける」ための活動ともいえる．看護師が患者のストレングスに気づくことで，無理強いや空振りではないケアとなり，その人らしさ，その人の意志を支えることにつながる（萱間，2016）．

そこで，文献より精神科看護師が看護実践のなかで

1　三重大学大学院医学系研究科看護学専攻博士前期課程
2　三重大学大学院医学系研究科看護学専攻広域看護学領域精神看護学分野

精神障害者のストレングスに気づいたきっかけを明らかにする．

## Ⅱ．研究方法

### 1．対象文献

医学中央雑誌 Web 版（Ver. 5）を用いて，Rapp らがストレングスモデルを提唱した 1990 年 1 月～2018 年 6 月までに収録された和論文を対象に検索した．検索は，キーワードとして「ストレングス」，「精神」を入力し，絞り込み条件として「看護」，「原著論文」を加えて検索を行った．検索の結果，70 件が検出された．

医学中央雑誌データベースにおける「原著論文」は，原著的な内容，形式を有していれば症例報告や短報などが含まれると定義され，学会抄録の類も多数存在する．そのため，検出された 70 件の文献について，研究目的に照らして研究者各人が熟読し，最初からストレングスに着目している研究は除外し，研究の結果として，精神科看護師が対象者のストレングスに気づいたきっかけが記述されている文献を抽出した．その後照合し，合意が得られるまで研究者間で検討し，分析対象文献を選定した．

### 2．分析方法

マトリックス方式（Garrard，2011）を用いて，対象文献のタイトル，著者，出典，発表時期，研究対象，目的，ストレングスに気づいたきっかけを抽出し，項目に沿って整理した．ストレングスに気づいたきっかけについては，対象文献の本文にストレングスに気づいたなどと記載されている文章や文脈を抽出した．分析の妥当性を確保するために，抽出の際は 2 名の研究者各人が抽出し，その後照合し，合意が得られるまで研究者間で検討を行った．

## Ⅲ．結果

### 1．対象文献の概要

検索された 70 文献のうち，研究の結果として精神科看護師（以後，看護師とする）が患者のストレングスに気づいたきっかけが記述されている文献は 12 件であった（表 1）．著者は全員が看護師で，研究場所は病棟が 10 件，病棟から地域にかけてが 1 件，地域が 1 件であった．

文献の発表時期は，1990～2005 年が 0 件，2006～2010 年が 3 件，2011～2015 年が 5 件，2016～2018 年が 4 件であった．

研究対象は患者が 8 件，看護師および看護師を含む医療者が 3 件，看護師と患者が 1 件であった．

研究目的は，事例から看護を振り返ったものが 6 件，看護師に必要な視点を明らかにしたものが 2 件，看護師の思考過程を明らかにしたもの，効果的なレクリエーションについて，看護師の変化が患者に及ぼした影響について，患者と看護師の思いを一致させるためのケアについてが，各 1 件であった．

研究方法はすべて質的記述的研究で，そのうち事例研究が 8 件であった．

### 2．対象文献の内容

対象文献から抽出されたストレングスに気づいたきっかけが記載されている本文は表 1 の通りである．看護師は，看護の振り返り，患者の話を聴くこと，患者の環境や状況が変わったこと，他職種の発言から，患者のストレングスに気づいていた．

#### 1）看護の振り返りからの気づき

さまざまな看護の振り返りから，看護師が患者のストレングスに気づいた文献は 3 件であった（No. 3, 10, 11）．

病棟業務や病棟規則の変更に伴い看護を振り返ってみると，看護師は患者へのかかわりが必要となった場面を，社会生活に適応するために伸ばす力と捉えており，患者のストレングスに焦点をあて，患者と協同してもっている能力の向上，あるいは発揮できるように援助していたことに気づいていた（No. 3）．

また，プロセスレコードによる看護の振り返りでは，プロセスレコードを用いることで，患者と看護師の思いのズレが明確になり，患者からのメッセージを看護師が理解することで，患者のストレングスに気づいていた（No. 11）．

カンファレンスによる看護の振り返りでは，患者の行動制限後に合同カンファレンスをくり返し行い，セルフケア能力の再査定と過去最高レベルなどを再認識した．その結果，看護師間で患者の人間像を的確に理解するきっかけとなり，患者のもっている力を知ることによって，看護の視点が患者の「問題」から患者の「力」へと変化していた（No. 10）．

#### 2）患者の話を聴くことからの気づき

患者の言葉に注目し，対話や傾聴をし続けるなど患者の話を聴くことから，看護師が患者のストレングスに気づいた文献は 3 件であった（No. 2, 4, 7）．

看護師は患者と何度も対話を行う中で，患者がどのように疾患を受け止めているかを傾聴，共感し，アセスメントした．そのことで，看護師は患者に退院希望と再入院はしたくないとの思いがあることを知り，その思いがストレングスだと気づいていた（No.7）．

看護師の傾聴し続けるかかわりが，患者に興味を示

表 1　対象文献一覧

| No | タイトル | 著者 ( 発行年 ) | 出　典 | 研究対象 | 目　　的 | ストレングスに気づいたきっかけ |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 災害時の援助を振り返り見えてきた精神科訪問看護の支援の視点－関東東北豪雨による水害経験の語りから－ | 名越ら (2017) | 日本精神科看護学術集会誌 60（1），452–453. | 看護師 4 名，作業療法士・精神保健福祉士各 1 名 | 災害時にスタッフが経験し実践した援助はどのようなものだったのかを振り返り，どのような視点をもった援助が必要であるかを明らかにする． | スタッフの語りから，災害時の援助は，（利用者の逆境での強さ）（快適に避難所生活が送れる利用者）（利用者の災害時の行動力）（災害時でも食事がきちんと食べられていた利用者）と危機状況におかれた場面から，利用者の強み「ストレングス」を捉えた視点があることに気づいた． |
| 2 | クロザピンを導入した治療抵抗性統合失調症患者の看護－副作用で倦怠感が強い患者の興味，関心に働きかけ日常生活行動の再獲得に繋がった事例を通して－ | 渡辺ら (2017) | 日本看護学会論文集：精神看護 47，83–86. | 30 歳代男性統合失調症 | クロザピン導入後の治療抵抗性統合失調症患者が，副作用で低下した日常生活行動を再獲得できた事例を振り返り，看護の方向性を明らかにする． | 副作用である倦怠感により，言語的な表出が乏しい患者に対して試行錯誤していた中で，キャッチボールをした後に，患者が「楽しかった」と感想を述べたことに注目した．患者の興味・関心を示したキャッチボールは，患者のストレングスであったと気づいた． |
| 3 | 病棟規則の見直しによる患者の変化と看護師の思考過程 | 藤原ら（2016） | 日本精神科看護学術集会誌 59（1），440–441. | 看護師 | 病棟業務や規則の変更に伴い，看護師のかかわりや介入が必要となった場面を看護師はどのように捉え援助しているのか，看護師の思考過程を明らかにする． | 病棟業務や規則の変更に伴い看護を振り返ったことで，看護師は患者へのかかわりが必要となった場面を，社会生活に適応するために伸ばす力と捉え，患者のストレングスに焦点をあて，患者と協同して，もっている能力の向上，あるいは発揮できるように援助していたことに気づいた． |
| 4 | 特定の職種と一般就労にこだわり続けていた A 氏を就労継続支援 B 型事業所につなげられた要因の検討 | 守屋ら（2016） | 日本精神科看護学術集会誌 59（1），76–77. | 30 歳代男性統合失調症 | 特定の職種や一般就労にこだわり続けていた A 氏に対して，その思いを受け止めつつ，段階を経た就労をめざしてかかわったところ，A 氏の考え方に変化が見られ，現実的な就労継続支援 B 型事業所につなげることができた．どのようなかかわりが考え方に変化をもたらしたのか，その要因を明らかにする． | 看護師は，当初，患者がこだわり続けることをネガティブに捉えていたが，傾聴し続けるかかわりにより，入院当初には語られなかった患者の秘めた思いが表出された．そのことで，看護師はネガティブな捉え方から意志の強さであると考え方が変化し，その意志の強さがストレングスなのだと気づいた． |
| 5 | 職種による視点の違いをプラスする－長期入院患者の院外活動から見えてきたもの－ | 原田ら（2015） | 日本精神科看護学術集会誌 58（1），138–139. | 看護師と作業療法士 | 看護師にとって患者イメージが固定化している長期入院患者に対し，看護師と作業療法士が協働で，院外活動を実施する中で，相互の視点の違いにはどのような意味があるのかを検討し，看護師が患者とかかわる中でプラスすべき視点について明確にする． | 院外活動時，同じ場面を看護師と作業療法士がそれぞれの視点でアセスメントした時に，明らかに視点が違うこと，かかわり方が違うことに気づいた．作業療法士は患者の行動を問題行動と捉えるのではなく，活動分析をすることで，できることとできないことをアセスメントし，かかわっていた．このことで看護師は，患者のストレングスの発見につながっていたことに気づいた． |
| 6 | 自殺企図を繰り返す統合失調症患者の看護－応用行動分析に基づいたかかわりを通して－ | 如澤ら（2014） | 日本精神科看護学術集会誌 57（3），334–338. | 20 歳代男性統合失調症 | 自殺企図を繰り返す統合失調症患者に対して行動分析に基づいた介入を行なった結果，不安が軽減され行動の変容や意欲の向上が見られた．精神科看護において，行動分析に基づいた介入を行うことの効果について，事例の経過を振り返り考察する． | 事例検討会の中で，他職種からも意見をもらい多面的に考えていく重要性を再認識できた．それとともに，ストレングスに目を向け援助していくことの必要性にも気づくことができた． |

表 1　対象文献一覧（つづき）

| No | タイトル | 著者 ( 発行年 ) | 出　典 | 研究対象 | 目　　的 | ストレングスに気づいたきっかけ |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 7 | アウトリーチ支援を拒み続けた統合失調症患者へのかかわり－心理教育を通じ病識の獲得に至った 1 事例－ | 森田（2014） | 日本精神科看護学術集会誌 57（3），299–303. | 40 歳代男性<br>統合失調症 | 病識のない統合失調症患者に緊急救急病棟と退院後の訪問看護で個別心理教育を行うことによって，患者が病識を獲得し，地域生活を継続できた看護実践を振り返り，実践への示唆を得る. | 看護師は患者と何度も対話を行う中で，患者がどのように疾患を受け止めているかを傾聴，共感し，アセスメントすることで，退院希望と再入院をしたくないとの思いが，ストレングスだと気づいた. |
| 8 | 反社会的行動を繰り返す患者の退院支援－被害妄想に基づく粗暴行為が改善した理由を振り返る－ | 垣田（2014） | 日本精神科看護学術集会誌 57（3），106–110. | 60 歳代男性<br>統合失調症 | 濃厚な支援が必要な統合失調症患者に対する多職種チーム医療の実際を振り返り，かかわりが有効であった点を明らかにする. | 反社会的行動を繰り返す患者の確認行為や頻繁な相談希望を，地元でかかわる支援センター所長は「慎重すぎる位に慎重」と評価し，肯定的に捉えられていたことで，看護師はそのこだわりの強さがストレングスだと認識した. |
| 9 | 閉鎖病棟によるレクリエーションの効果－市内外出の取り組みを通して－ | 甲部ら（2012） | 日本精神科看護学術集会誌 55（1），364–365. | 閉鎖病棟入院患者 15 名，病棟看護師 20 名 | 市内外出に対する患者とスタッフそれぞれの意見を把握し，より効果的なレクリエーションを考察する. | 病棟では「家に帰りたくない」「ここにずっと居たい」と話す患者が，外出場面では「家に帰りたい」と話す. 外出活動を通し，看護師と患者がともに同じ目的・時間を共有することで，現実場面に目を向けたコミュニケーションができ，患者の思いを聴くことができ，患者のストレングスの発見となっていた. |
| 10 | 脱抑制状態の精神発達遅滞患者へのセルフケアアプローチ－看護の視点の変化がセルフケア能力の低下・発揮に大きく作用した事例を通して－ | 亀田（2010） | 日本精神科看護学会誌 53（3），169–173. | 50 歳代男性<br>精神発達遅滞 | 退院までのかかわりのなかで，看護の視点の変化が患者へのかかわりにどのように影響して，患者のセルフケア能力の変化につながったのかについて検証する. | 行動制限を要した患者の合同カンファレンスをくり返し行い，セルフケア能力の再査定と過去最高レベルなどを再認識した. その結果，看護師間で患者の人間像が的確に理解でき，患者のもっている力を知ることによって，看護の視点が患者の「問題」から，患者の「力」へと変化していた. |
| 11 | プロセスレコードによる退院支援の検討－退院に対する“思い”が一致するための全体像分析－ | 冨高（2008） | 日本精神科看護学会誌 51（3），461–465. | 60 歳代男性<br>統合失調症 | 退院に対する患者と看護師の思いのズレを一致させるためのケアの展開について，1 事例を通して，プロセスレコードを活用し検討する. | プロセスレコードを用いることで，患者と看護師の思いのズレが明確になり，患者からのメッセージを看護師が理解することで，患者のストレングスに気づいた. |
| 12 | 長期入院を経て退院を目指す患者への看護援助－現状認識を促す関わりから，退院への試みを支えて－ | 坂上（2006） | 日本精神科看護学会誌，49（2），269–273. | 50 歳代男性<br>統合失調症 | 長期入院患者が，金銭管理への援助から退院を目指した経過を振り返り，今後の看護に役立てる. | 看護師が退院支援でかかわるうちに，患者は外出前にしっかりと身支度をし，地域住民と友情を築けている社会性という患者の優れている力（ストレングス）に気づいた. |

しているというサインとなり，入院当初には語られなかった秘めた思いが表出されていた．それまで看護師は，患者がこだわり続けることをネガティブに捉えていた．しかし，秘めた思いを知ったことで，看護師はネガティブな捉え方から意志の強さであると考え方が変化し，その意志の強さがストレングスなのだと考えた（No. 4）．

また，薬の副作用である倦怠感により，言語的な表出が乏しい患者に対して試行錯誤する中で，キャッチボールをした後に患者が「楽しかった」と感想を述べたことに注目した．このことから，患者の興味・関心を示したキャッチボールは，患者のストレングスであったと気づいていた（No. 2）．

**3）患者の環境や状況が変わったことからの気づき**

院外活動や市内外出など病院の外に出ること，災害などで患者の環境や状況が変わったことから，看護師が患者のストレングスに気づいた文献は 3 件であった（No.1, 9, 12）

病棟では「家に帰りたくない」「ここにずっと居たい」と話す患者が，外出場面では「家に帰りたい」と話していた．外出という活動を通し，看護師と患者がともに同じ目的・時間を共有することで，現実場面に目を向けたコミュニケーションができ，患者の思いを聴くことができ，患者のストレングスの発見となっていた（No. 9）．

看護師は退院支援での外出をきっかけに，患者が外出前にしっかりと身支度をして出かけ，地域の住民と友情を築けている社会性という患者のストレングスに気づいていた（No. 12）．

また，災害という危機状況におかれた場面においても，災害時の援助には利用者の強み「ストレングス」を捉えた視点があることに気づいていた（No. 1）．

**4）他職種の発言からの気づき**

事例検討会や患者支援での他職種の発言から，看護師が患者のストレングスに気づいた文献は 3 件であった（No.5, 6, 8）．

事例検討会で他職種からも意見をもらい，多面的に考えていく重要性を再認識し，ストレングスの発見となっていた（No. 6）．

反社会的行動を繰り返す患者の確認行為や頻繁な相談希望について，地元でかかわる支援センター所長は「慎重すぎる位に慎重」と評価し，肯定的に捉えられていた．そのことで，看護師はそのこだわりの強さがストレングスだと気づいていた（No. 8）．

また，院外活動時，同じ場面を看護師と作業療法士がそれぞれの視点でアセスメントした時に，作業療法士は患者の行動を問題行動と捉えるのではなく，活動分析することで，できることとできないことをアセスメントし，かかわっていた．看護師は作業療法士の別の角度からの肯定的な発言から，患者のストレングスの発見につながっていた（No. 5）．

## IV．考察

### 1．精神科看護師が患者のストレングスに気づいたきっかけ

精神科看護師が患者のストレングスに気づいたきっかけは，看護の振り返り，患者の話を聴くこと，患者の環境や状況が変わったこと，他職種の発言からであった．

看護職者は，看護を振り返ることによって対象者への理解や認識が深まり，対象者の新たな側面を発見すると上田ら（2010）は述べている．日々，看護をしている時は患者の問題に焦点がいきがちであったが，プロセスレコードやカンファレンスなどで看護を振り返ったことで，患者の新たな一面を発見したり，今までとは違った側面から患者を捉え，ストレングスに気づくことができたと考える．

看護師は，患者との対話や，患者の語りを傾聴することで，患者のストレングスに気づいていた．萱間（2016）は，対話することで関係性は変わると述べている．精神科において，長期入院によるあきらめや訴えを聞いてもらえなかった過去の経験から自分の思いを語らない患者は少なくない．しかし，何度も話し合うことや看護師が傾聴する姿勢を患者に示すことで，関係性が変化し，患者が自分の思いや夢を話してみてもいいと思える関係性が構築でき，患者のストレングスに気づくことができたと考える．小坂（2015）は，ストレングスは，その人の経験やストーリー，その人が生活してきた文化や文化の伝承の中に多く含まれており，対話の中からその人の経験の中に潜在していたストレングスを得ることができると述べている．看護師は，患者の秘めた思いを知ることで，患者の希望や楽しみを共有することにつながり，新たな視点や価値観で患者を捉えることができ，患者のストレングスの気づきにつながったと考える．

また，看護師は病院の外に出る外出など患者の環境や状況が変わったことから，ストレングスに気づくきっかけを得ていた．山下ら（2012）は，病院の外に出ることについて，入院生活ではできない体験を外出によってできたことで退院の意思表示をするようになると述べている．患者は外出により，現実的な世界が見え，やりたかったことや，あきらめていた夢など，普段はなかなか話せない思いを表現していた．その結果，看護

師は，普段見ることのできなかった患者の健康的な部分や秘められた思いを知ることで，患者のストレングスに気づくことができたと考える．

また，他職種の発言から患者の新たな一面を知る機会となり，患者に対する捉え方が変化し，患者のストレングスの気づきにつながっていた．笹本ら（2015）は，長期入院患者の多い精神科において，看護師は知らず知らずのうちに患者に先入観を持ってしまいがちだが，さまざまな職種が違う視点から患者を捉えることで，ありのままの姿が見えてくると述べている．他職種の発言を通して，他職種だからこそ見えていた患者のストレングスに看護師が気づいたり，問題に焦点を当てていた時には知ることができなかった患者のストレングスに気づくことができたと考える．

### 2. 精神科看護師が患者のストレングスに気づくための支援

精神科看護師が患者のストレングスに気づくきっかけとして，カンファレンスや他職種とのかかわりを通して，情報を共有したり，話し合うことで患者のストレングスに気づくことができていた．よって，精神科看護師が患者のストレングスに気づくための支援としてまずは，患者について，情報を共有することやカンファレンスを実施することで，患者を知る必要がある．人は外からの刺激や環境に機械的に反応するのではなく，目標，目的を達成するために自ら性格を選び取っており（岸見，2017），人は相手や関係性によって見せる顔を変える．また，時と場合によっても変わることがあるため，多くの視点から患者を捉えることで，患者のストレングスが見えてくると考える．そのため，チームや他職種で患者の情報を共有し，患者を多角的に捉えていくことが必要である．

もうひとつは，看護を振り返ることや，患者とじっくりかかわることによって，患者の新たな側面が見え，ストレングスに気づくことができていた．対話の中で，患者の思いを聴くことや，自分の思いを伝える時間を持つことで，関係性が構築され，患者の新たな一面を見ることができると考える．Underwood（2003）は，看護者は知識として多くのことを学んでいるが，知識と同様に，自分の接し方と思い込みを再検討することの重要性を述べている．看護師は，今一度，自分の看護を振り返り，患者と向き合う必要があると考える．そうすることで，今まで視点を変えてみることをしていなかった自分に気づき，患者のストレングスに気づくことができると考える．

## V．本研究の限界と今後の課題

本研究は，対象となった文献数が少なく，紙面上に表現されていない精神科看護師のストレングスに気づいたきっかけがあることが推測される．また，今回対象とした文献は，本文にストレングスに気づいたなどと記載されている文章を抽出しているが，ストレングスが十分理解されたうえでの記載かどうかを判断するには限界があることは否めない．

今後は，本研究で得られたことを基に，精神科看護師を対象にして患者のストレングスに気づいたきっかけを調査したり，看護師の思考過程を明らかにしていく必要がある．

## VI. 結論

精神科看護師が患者のストレングスに気づいたきっかけについて，1990～2018 年に収録された和論文を対象に検討した．その結果，看護の振り返り，患者の話を聴くこと，患者の環境や状況が変わったこと，他職種の発言をきっかけにして，看護師は患者のストレングスに気づいていた．

精神科看護師がストレングスに着目するための支援として，カンファレンスや他職種のかかわりなどを通して患者の情報を共有し，多面的に捉えること，自らの看護を振り返ることや患者と時間を共有し，患者の思いや希望を知ることで，患者のストレングスに気づくことができることが示唆された．

## 利益相反

本研究における利益相反は存在しない．

## 文　献

Garrard, J. (2011). Health Sciences Literature Review Made Easy: The Matrix Method 3th ed. Aspen Publishers, New York / 安部 陽子（訳）(2013)．看護研究のための文献レビュー：マトリックス方式（p. 16），医学書院，東京．

萱間真美（2016）．リカバリー・退院支援・地域連携のためのストレングスモデル実践活用術，p.32, 98. 医学書院，東京．

岸見一郎（2017）．アドラーをじっくり読む，p.132. 中央公論新社，東京．

北川節子（2008）．看護基礎教育における患者に対する「教育・指導」の意義と変遷－戦前から 1967 年（規定規則改正）まで－，金沢星稜大学人間科学会誌，1 (1), 19–26.

小坂恵美（2015）．長期入院中の統合失調症をもつ人のストレングスに焦点を当てた地域生活への移行に向けた看護援助に関する研究，埼玉県立大学紀要, 17, 31–36.

厚生労働省（2010）．精神保健福祉法について．https://www.mhlw.go.jp/kokoro/nation/4_04_00law.html.（2018年9月17日閲覧）

三品桂子（2003）．ストレングス視点に基づく生活支援，精神科臨床サービス, 3(4), 467–472.

文部科学省（2017）．看護学教育モデル・コア・カリキュラム ～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～．http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078gaiyou/icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf.（2018年5月15日閲覧）

野中猛（2011）．図説医療保健福祉のキーワード　リカバリー, p.17. 中央法規, 東京.

岡田摩理，泊祐子（2017）．わが国の看護基礎教育で求められてきた看護の専門性を支える思考の内容と教育の動向，日本看護学教育学会誌, 27(2), 27–40.

Rapp, C. A., Goscha, R. J. (2012). The Strengths Model: A Recovery-Oriented Approach Mental Health Services 3th ed.Oxford University Press,England / 田中英樹 監訳（2014）．ストレングスモデル リカバリー志向の精神保健福祉サービス（第3版, p.10, 130），金剛出版, 東京.

笹本美佐，岡崎朋子，追中敏孝，金本真理子（2015）．精神科病院において多職種連携で行う統合失調症患者への退院支援で看護師が得た学び．日本赤十字広島看護大学紀要, 15, 21–29.

上田修代，宮﨑美砂子（2010）．看護実践のリフレクションに関する国内文献の検討，千葉看護学会会誌, 16(3), 61–68.

Underwood, P.(2003). Making Use of Nursing Theory at the Bedside / 南裕子 監修（2003）．看護理論の臨床活用　パトリシア・R・アンダーウッド論文集（p.299），日本看護協会出版会, 東京.

山下正子，松田さと美，新屋一（2012）．長期入院患者の退院支援　患者の気持ちが退院へと変化した要因，日本精神科看護学術集会誌, 55(1), 488–489.

## 対象文献

1. 名越英夫，保田さとみ，重永忠澄，高橋毅，菱田奈保美，村岡由規，稲葉藍（2017）．災害時の援助を振り返り見えてきた精神科訪問看護の支援の視点－関東東北豪雨による水害経験の語りから－，日本精神科看護学術集会誌，60(1)，452–453.
2. 渡辺爾，中村ゆきえ，福塚明，小川外志江，乾早苗，宮島大介，川畑乃梨子，加藤梨菜，中川智恵（2017）．クロザピンを導入した治療抵抗性統合失調症患者の看護－副作用で倦怠感が強い患者の興味，関心に働きかけ日常生活行動の再獲得に繋がった事例を通して－，日本看護学会論文集：精神看護，47，83–86.
3. 藤原直隆，〆本梨紗，宮野太志（2016）．病棟規則の見直しによる患者の変化と看護師の思考過程，日本精神科看護学術集会誌，59(1)，440–441.
4. 守屋浩，清水つかさ，清水智嘉（2016）．特定の職種と一般就労にこだわり続けていたA氏を就労継続支援B型事業所につなげられた要因の検討，日本精神科看護学術集会誌，59(1)，76–77.
5. 原田潤幸，林みどり，矢田純一（2015）．職種による視点の違いをプラスする－長期入院患者の院外活動から見えてきたもの－，日本精神科看護学術集会誌，58(1)，138–139.
6. 如澤学，岩渕誠一，平野のり子，河田祐輔，今野辰則，上田広大，橋場さゆり，楢山暁美，平石顕司，曙有希（2014）．自殺企図を繰り返す統合失調症患者の看護－応用行動分析に基づいたかかわりを通して－，日本精神科看護学術集会誌，57(3)，334–338.
7. 森田浩司（2014）．アウトリーチ支援を拒み続けた統合失調症患者へのかかわり－心理教育を通じ病識の獲得に至った1事例－，日本精神科看護学術集会誌，57(3)，299–303.
8. 垣田宜邦（2014）．反社会的行動を繰り返す患者の退院支援－被害妄想に基づく粗暴行為が改善した理由を振り返る－，日本精神科看護学術集会誌，57(3)，106–110.
9. 甲部直志，岡浦真心子（2012）．閉鎖病棟によるレクリエーションの効果－市内外出の取り組みを通して－，日本精神科看護学術集会誌，55(1)，364–365.
10. 亀田康彦（2010）．脱抑制状態の精神発達遅滞患者へのセルフケアアプローチ－看護の視点の変化がセルフケア能力の低下・発揮に大きく作用した事例を通して－，日本精神科看護学会誌，53(3)，169–173.
11. 冨高里織（2008）．プロセスレコードによる退院支援の検討－退院に対する“思い”が一致するための全体像分析－，日本精神科看護学会誌，51(3)，461–465.
12. 坂上章（2006）．長期入院を経て退院を目指す患者への看護援助－現状認識を促す関わりから，退院への試みを支えて－，日本精神科看護学会誌，49(2)，269–273.